様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　２４年　６月　２５日現在

機関番号：８７５０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2011
課題番号：20520608
研究課題名（和文）　瀬戸内海西部における阿弥陀信仰の歴史的展開の研究

研究課題名（英文）　Study on historical development of belief in Amitabha in the western part of the Seto Island Sea

研究代表者
櫻井　成昭（SAKURAI　NARIAKI）
大分県立歴史博物館・学芸調査課・主任学芸員
研究者番号：80435916

研究成果の概要（和文）：本研究は、浄土宗寺院および浄土真宗寺院の什物などをもとに、阿弥陀信仰の歴史的展開の把握を目指したものである。瀬戸内海西部地域では、浄土宗寺院および浄土真宗寺院の多くが 15 世紀後半～17 世紀前半に創建されたとされる。従来、こうした由緒をもとに、法然あるいは親鸞の教えの広がりも 15 世紀後半以後に本格化したとされてきた。しかし、本研究において、親鸞の教えは 14 世紀に伝播していたこと、地域社会では法然や親鸞の教えが複合しつつ展開したこと、そうした状況は 17 世紀以後もみられたことを明らかにした。
研究成果の概要（英文）：This study aimed to grasp of historical development of belief in Amitabha faith based on furnitures of Jodo sect temple and Jodo Shishu sect temple. In the western part of Seto Island Sea, it is supposed that meny of Jodo temples and Jodo Shishu sect temples were founded in the period of the second half of 15 century to the first half of 17 century, Conventionally, based on such lineage, it has been supposed that a spread of thoughts of Hounen or Shinran was also got into stride on after the second half of 15 century. However, this study clarified the following matters. These are, the thought of Shinran had been propagated in the 14 century, it had been exhanded while shaping a complex thoughts of Shinran and Hounen in the local community, and this situation was also observed after the 17 century.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	0 円	0 円	0 円
２００８年度	900,000 円	270,000 円	1,170,000 円
２００９年度	500,000 円	150,000 円	650,000 円
２０１０年度	500,000 円	150,000 円	650,000 円
２０１１年度	700,000 円	210,000 円	910,000 円
総　計	2,600,000 円	780,000 円	3,380,000 円

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：阿弥陀信仰・地域間交流・村落構造

１．研究開始当初の背景

瀬戸内海西部における阿弥陀信仰については、平安時代に「天台浄土教」の流入、室町時代後半から法然や親鸞の教えが伝播するという、宗派的視点に基づいて、その歴史や意義が語られることが多かった。瀬戸内海西部には、富貴寺大堂（大分県豊後高田市）や臼杵石仏（大分県臼杵市）をはじめ、石造物など、さまざまな阿弥陀信仰の遺産が確認

できる。こうした阿弥陀信仰遺産の存在をふまえた上で、どのように阿弥陀信仰が受容されたかなお明確でなかった。

また、上記の宗派的視点に基づく研究においても、「天台浄土教」から法然の教えそして親鸞の教えへというように、１つの教えから別の教えに移行していく形で理解される傾向があった。むしろ、異なる教えが重なりつつ展開するという視点からの歴史は語られることがなかった。

２．研究の目的

本研究は、瀬戸内海西部の豊前国と豊後国（福岡県東部と大分県）における阿弥陀信仰の歴史的展開について、主に浄土宗および浄土真宗寺院の什物・文献・行事などを通して解明するものである。

阿弥陀信仰は、わが国の仏教史において主要なものと位置付けられる。その中で、阿弥陀如来への信仰を根本とする法然および親鸞の教えをうけつぐ浄土宗と浄土真宗に関しては、既存の阿弥陀信仰との関わりが論じられることが少なかった。

こうした点をふまえ、本研究は寺院に関わる有形無形の文化財￥、あるいは各寺院の所在地に残る文献資料などをもとに、豊前国と豊後国の浄土宗・浄土真宗寺院の歴史や行事を多面的に検討する。ここでは、両宗の伝播の様相を包括的に捉えるとともに、既存の阿弥陀信仰との関わり、そして両宗が重層的に展開する過程を解明することで、特に中世～近世初頭の阿弥陀信仰および地域振興の実態解明をめざす。なかでも、親鸞の教えの広がりは 15 世紀後半以後に本格化したとされてきたが、その見直しを意図した。また、各寺院の門徒の分布範囲などは、各寺院の創建段階における政治上・経済上のつながりを示すものとみられ、寺院の存立基盤となる村落構造についても分析を加える。

なお、法然および親鸞の教えは、瀬戸内海を通じてもたらされており、実際豊前国・豊後国は古代から拠点港湾が所在した。そこで、本研究は豊前国から豊後水道にかけての沿岸部を重点調査地域とし、瀬戸内海域の地域間文化交流の解明に資する。

３．研究の方法

明治時代に作成された「寺院明細牒」を調査し、そこに記載された寺院の創建年代を調把握した。これを通して、19 世紀半ば段階で、法然や親鸞の教えの広がりをどのように認識していたかを検討した。

本研究の調査対象地における浄土宗・浄土真宗寺院の数は 300 ヶ寺をこえる。そのため、本研究では、各地域で歴史や規模の面で拠点となる寺院の什物の調査を優先的に実施した。そして、多角的な検討から什物の制作年代を可能な限り示すこととした。

次に、本研究では、阿弥陀信仰の重層性に留意し、宗派をこえた、いわば錯綜する形で信仰が展開するという視点から分析を加えた。そこでは、錯綜する信仰の様相を記録することを第一義とした。

また、本研究では寺院と地域社会とのつながりにも留意した。これは、阿弥陀信仰に限らず、諸仏の信仰を取り上げる時、寺院あるいは地域社会のいずれかに視座を据える場合が多いためである。例えば、現在の門徒の分布範囲は、従来は取り上げられることがあまりなかった事象であるが、ここに少なからず寺院創建の歴史性に基づくものと理解されるため、本研究では調査事項の１つとした。もちろん、現在の門徒の分布範囲は歴史的に形成されたものであるが、現況の記録化をまず実施した。このように、寺院と地域社会とのつながりについては、主に聞き取り調査による現況の記録化を行い、現況からから遡及的に歴史を辿る方法をとった。

なお、寺院と地域社会という点からすると、浄土真宗寺院の門徒の「民俗・行事」について調査を重視した。こうした調査事例は、本研究の調査対象地である九州で少ないものの、調査対象地すべてで実施することは難しく、いくつかの拠点寺院において実施した。

４．研究成果

本研究の年度ごとの成果は以下のとおりである。

（1）平成 20 年度

大分県佐伯市を中心に寺院の什物および堂宇の所在確認調査、同地域の寺院などの分布状況や歴史を知る上で基礎となる佐伯藩政史料の調査とマイクロ複写を実施した。また、信仰の基盤となる村落構造や開発のあり方についても調査を実施した。あわせて調査実施に不可欠となるベースマップの基礎となる森林基本図の複写を行った。

大分県佐伯市は、江戸時代の支配体系でいえば、佐伯藩の支配地である。このうち、豊後水道沿岸部、特に佐伯湾沿岸の村は、佐伯湾北部の佐伯市上浦地区に浄土真宗寺院の真宗寺などを除くと、堂宇のみが所在する。江戸時代の寺檀制のもとで、佐伯湾沿岸の村は、基本的に佐伯城下町に所在する寺院の檀家であったことが確認できた。いわば、佐伯湾沿岸の村に関しては、城下町の寺院が一元管理する形を採用していたのである。

また、当該地域の浄土宗・浄土真宗寺

院およびその末堂などには、両宗が伝播したという 15～16 世紀以前に制作されたとみられる阿弥陀如来像があり、浄土宗および浄土真宗の広がりは、従来示されている 15～16 世紀以前からみられること、あるいは両宗は既存の阿弥陀信仰と関わったことが確認できた。

（２）平成 21 年度

大分県臼杵市から別府湾沿岸部にかけての寺院や末堂の所在確認および什物の調査を実施した。また、平成 20 年度に引き続いて佐伯藩政史料の調査とマイクロ複写を行うとともに、豊前国と豊後国の浄土宗および浄土真宗寺院に関わる文献史料の調査を東京大学史料編纂所で行った。

浄土宗および浄土真宗寺院の歴史と文化の解明には、由緒書をはじめとする古記録類の検討が重要である。一連の調査で、西山浄土宗の大橋寺（臼杵市）や浄土真宗の覚正寺（日出町）などの記録類を調査した。その成果として、覚正寺所蔵の江戸時代の『年中行事記』を翻刻し、大分県立歴史博物館の研究紀要に掲載した。

平成 20 年度からの調査で、浄土宗および浄土真宗寺院のうち、開基の由緒が古い寺院は、門徒が寺院の所在地周辺だけでなく、遠隔地にも広汎に分布することが改めて確認された。覚正寺はそうした寺院の１つで、広汎な門徒分布は江戸時代からみられることが、「年中行事記」で確認できた。このような門徒分布の形成がどのような要因に基づくか、ある一定のエリアでの門徒分布を一覧にすることは今後の課題としてある。特に、宇佐市院内町・安心院町は、覚正寺をはじめ遠隔地にある複数の浄土真宗寺院の門徒が分布し、上述した寺院と門徒との関係を検討する上で１つのモデル地区になると考えられる。

なお、一連の調査の成果について、真宗大谷派日豊教務所で「浄土真宗と阿弥陀信仰」の題名で研究代表者の櫻井が講演を行った。これは、調査成果の公開の一環として、現段階での調査報告を寺院のご住職などの寺院関係者にお知らせした。

（３）平成 22 年度

平成21年度に引き続いて別府湾沿岸以南と内陸部の浄土宗および浄土真宗寺院での什物調査を実施した。また、村落の信仰拠点である仏堂の歴史を解明するため、大分県公文書館所蔵の近代行政資料のうち、仏堂の統廃合を記した「社寺検査書類」の分析とともにマイクロ複写を行った。一方、県外での調査は、東京大学法学部法制史資料室で、豊前・豊後の寺院と社会に関する資料調査を行った。

浄土宗および浄土真宗寺院の歴史と文化については、寺院創建以前から、その地域に所在した信仰、特に阿弥陀如来への信仰と結びつきながら、展開したと想定される。そこで、善教寺(真宗大谷派・佐伯市)の「開基仏」とされる阿弥陀如来像の詳細な調査を実施したところ、本像は阿弥陀独尊来迎図の様式であり、14世紀の製作と位置づけられた。寺伝で、善教寺は応永13年(1406)の開基とされており、本像はこうした寺伝を裏付ける什物、すなわち親鸞の教えが豊後水道では、少なくとも15世紀初には伝播していたことが知られる。また、内陸部の拠点寺院の調査では長福寺(日田市)の什物調査を実施した。

このような成果の一端として、長福寺所蔵の聖徳太子絵伝の紹介を大分県立歴史博物館の研究紀要に掲載した。本絵伝は、江戸時代に製作されたものであるが、現在の大分県に聖徳太子絵伝の作例は少なく、太子信仰と浄土真宗の広がりなどを考える上でも重要な什物と考える。

なお、調査成果の公開の一環として、大分県立歴史博物館博物館において、平成23年１月に「親鸞聖人絵伝」の講座を行った。

（４）平成 23 年度

国東半島域から周防灘沿岸部で、重点的に調査を実施した。あわせて、時宗寺院の永福寺（別府市）の所蔵記録類の調査も行った。永福寺の調査では、江戸時代に親鸞聖人像を安置したことが確認された。これは、宗派を基本とした視点で捉えられる事象ではなく、むしろ中世に垣間見られる、重層した形での阿弥陀信仰の一例として注目される。

あるいは、今年度は浄土真宗寺院の什物について、赤外線撮影とともに、平尾良光氏(別府大学教授)に依頼して、蛍光Ｘ線による顔料分析を行った。このうち、善教寺（真宗大谷派・佐伯市）の「開基仏」とされる阿弥陀如来像については、使用された顔料から、14世紀代の制作とされた。この成果は、平成22年度に実施した様式からの調査成果と共通するものであった。このような顔料分析は、親鸞聖人絵伝で実施すると、使用顔料の変遷を知ることができると推測され、今後の重要な課題と考える。

平成23年度は本研究の最終年度にあたるため、一連の研究成果をふまえて、大分県立歴史博物館で企画展「念仏―「こころの安穏」をもとめて―」（平成23年12月８日～平成24年１月16日）を開催し、解説リーフレットも作成した。また、年度末には報告書を刊行した。

（５）以上のような研究成果をふまえ、本研究の成果の主要な点をまとめると、以下のとおりである。

①親鸞の教えは、瀬戸内海西部では沿岸部で 14 世紀に伝播していたことが、什物調査などから確認された。
②寺院と檀家のつながり、檀家の分布などに、過去の歴史が少なからず反映されていることが確認できた。
③法然や親鸞の教えは、地域社会においては複合しつつ展開し、いわば重層的な在り方であった。こうした状況は、17 世紀以後も確認できた。
④調査成果を、大分県立歴史博物館の平成 23 年度企画展「念仏―「こころの安穏」をもとめて―」として広く公開するとともに、諸講座でも成果を公開した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
①<u>櫻井成昭</u>、浄土真宗寺院の年中行事、大分県立歴史博物館研究紀要、11、pp61～pp80、2010、査読無

②<u>櫻井成昭</u>、近世の聖徳太子絵伝、大分県立歴史博物館研究紀要、12、pp64～pp78、2011、査読無

〔学会発表〕（計１件）
①<u>平川　毅</u>、近世の耕地開発に関する一試論、大分県地方史研究会、2008

〔図書〕（計２件）
①<u>櫻井成昭</u>、念仏の歴史と文化、大分県立歴史博物館 2011、査読無

②<u>櫻井成昭</u>、<u>菅野剛宏</u>、<u>髙宮なつ美</u>、瀬戸内海西部における阿弥陀信仰の歴史的展開の研究報告書、2012、査読無

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
櫻井　成昭（SAKURAI　NARIAKI）
大分県立歴史博物館・学芸調査課・主任学芸員
研究者番号：80435916

(2)研究分担者
菅野　剛宏（KANNO　TAKAHIRO）
大分県立歴史博物館・学芸調査課・主任学芸員
研究者番号：70435915
平川　毅（HIRAKAWA　TSUYOSHI）
大分県立歴史博物館・学芸調査課・主任学芸員
研究者番号：90435917
髙宮　なつ美（TAKAMIYA　NATSUMI）
大分県立歴史博物館・企画普及課・学芸員
研究者番号：20580533